

サンパウロの日本語雑誌『時代』

——日本語観及び日本語教育観——

一、はじめに

私は、一九八九年三月より一九九〇年二月まで国際交流基金によりブラジル・サンパウロ大学に客員教授として派遣された。目的はサンパウロ大学日本文化研究所に所属し、ブラジルにおける日本語研究、日本語教育についてサンパウロ大学日本文化研究所スタッフとの研究討論及び日本語日本文学専攻学生の指導であった。

サンパウロ大学はサンパウロ市の北西ブタントン大都市にある。日本文化研究所は大学構内の南西部の入口近くにあり、有名なブタントン毒蛇研究所に接する。日本文化研究所の建物は、鉄筋コンクリート三階建て、一階は管理室及び機械室、二階は玄関ホール、講義室、L1教室、茶室用の和室、三階は図書館、教官研究室、学生用自習室などである。

図書館は、書籍約二万冊、雑誌約五千冊を所蔵し、全て開架方式をとる。蔵書の大多数は日本語のものである。その他ポルトガル語英語の文献もある。文献の種類は、日本語学、日本文学、歴史学、哲学、芸術等およそ人文科学の分野のものが大多数を占める。社会科学の分野のものもあるが、人文分野の十分の程度と思われる。自然科学の分野のものはさらに少なく社会分野の半分以下である。

石神 照雄

人文科学の文献は、日本文学についていえば、岩波『日本古典文学大系』、小学館『日本古典文学全集』などといった全集類の主なものはほとんどある。日本語学の分野でも各種の講座ものなどがある。これらの中には、国際交流基金の援助によるもの、客員教授の携行教材の寄贈によるものがかかなり多くあると思われる。しかしながら、携行教材などは各々の派遣教授独自の意志によるものであるところから、研究書については必ずしも系統的な収書となっていない面がある。

研究所側の説明によれば、収蔵図書には個人の寄贈もあるとのことであった。在任中では、岩波文庫百冊がある日系人より寄贈された。

雑誌については、『国語と国文学』『国語・国文』『国語学』『萬葉』『解釈と鑑賞』などがある程度揃って所蔵されていたが、完全なものではなかった。大学の紀要類も鋭意収集中であるとのことであったが、上記の国語国文関係に比べるとその収集は始まったばかりという状態であった。

新聞は、『朝日新聞』の衛星版、サンパウロの日本語新聞の『サンパウロ新聞』『パウリスタ新聞』などを見ることができた。ただし、これら新聞は日本社会、日本文化、日本語についての情報収集

を目的に切抜きファイル作成をするものであり、適宜処分されていた。従って過去に遡って読むことはできなかった。

日本文化研究所の図書館は、言わば日本の大学図書館の人文分野を眺めているといった感じであった。そのことは、裏返せばこの図書館にブラジルの日系人についての情報を得ることはできなかったということである。

さて、ここに紹介しようとする『時代』は帰国間際となった本年（一九九〇年）一月図書館内の司書用スペースの棚にあったものを偶然見つけたものである。一号から一五号まで全一四冊（九号十号は合冊）である。サンパウロ大学日本文化研究所にあるものとしては唯一の日系人社会を知る資料であった。「寄贈者増田秀一、一九八六年八月一八日」と第一号の目次の下に記されている。

ところで、「国際化」「日本語教育」が社会的にも今日的主題とされてはいるが、歴史的な視点を広く基盤とした検討に至るには過去の資料は余りにも少なく、整備されているとは言いがたい。今日の日本語教育が、非日本語母語者を対象とするものを意味しているところからは、日系人という日本語母語者の子孫に対してのものは、あるいは特別の場合のものといった観点を生じさせることになるやもしれない。しかしながら、そのことも含めて、日本語を日常の暮しのための母語としない、ないしは、することが希な地域での日本語観日本語教育観がいかなるものであったかを知ることが、それ自体歴史的にも意味のあることである。そこにみられる見解が今日の学問的水準とかけ離れているものであったり、先入観による誤解などによるものであるにしても、そういった見解がどのようなものであり、どのように伝播されていくものかということ、日本語を教育するという教育的観点からは重要な問題である。

さらに広く考えるならば、日本語観とは日本語を母語とする者自身がその文化をどのようなものとして考えるかということへと連なる問題である。

今日に於いても、日本語という言語、日本語の文法などをテーマに語るべき、冷静な議論に至ることなくいたずらに感情的に否定的見解を披歴することが一つの姿として容認されることがある。どのような見解をもつことも自由であるとは言え、伝播されている見解を何等の疑いもなく増幅する拳を繰り返すことは、合理的なものではない。不可思議である。学問的立場といわゆる常識社会通念といったものが必ずしも重なるものではなく、また我々の生活とはそういった社会通念の上に成り立っているものであるとはいえず、この不可思議な振舞いを自ら対象化し検討することができるとはいえず、この問題をどれだけ合理的に処理できるかに連なる。「国際化」「日本語教育」という今日的課題を考える上でも、過去の姿を正確に把握することは、それがどこまで合理的になり得るかを見極める上で極めて重要である。

本稿は、このサンパウロで発行された雑誌『時代』がどのようなものであるかを紹介するとともに、そこに見出される日本語観及び日本語教育観を提示し、今後の研究に役立てようとするものである。

二、『時代』と「土曜会」

『時代』は「土曜会」という名称の組織の同人誌である。これについては、第一号に会報が載せられているので、これを引用する。（なお、以後引用するにあたっては、旧字体を新字体に改めるなど表記を変更することがある。）

△第三回準備会報告

前二回の会合で種々話し合った結果、みんなの意向も略判ったので、次回は一挙に具体化しようといふことを申し合わせて第三回会合を一九四六年九月二八日午後三時から蜂谷邸で開いた。出席者半田、河合、鈴木、斉藤、増田、木村、本山、安藤、江見の九名、橋本は不幸チブスを病んで入院、顔を見せなかったのは残念だったし、其他にも不参加があつて少し淋しかったが、丁度出聖中の輪湖老を拉し来て会合の模様を見てもらつたのは好都合であつた。前回に倣つて進行係に江見を推して話を進めた。以下其の報告である。

(一) 前回の申し合わせに基き、皆の意見を集まつただけ発表した。それらを総合して討議した結果、次のように意見が一致した。即ち会の趣旨・目的と看做してもよいと思ふ。

(イ) 今後は真面目な文化運動がどうしても必要だからその展開の為の組織をつくる。

(ロ) 此の組織は政治性のあるものであってはいけない。その存在が他日客観的に政治性を付与されるような場合にたち至つてもそれは飽くまで客観に止るべきで最初から政治性を帯びて発足することを厳に戒めたい。

(ハ) 故にこの組織は同士の親和を図り、文化生活の向上を計りことを目的とする。

(ニ) 同士としては文化的発展を心から希求し実行することに熱意のある人であれば、喜んでこれを迎える。但し最初から多勢をたのむことは不必要だし危険でもある。要は、精銳・充実・漸進・永続の四要素を具備したい。

(ホ) 同士は此の組織に依つて何ら拘束されぬことにしたい。

研究・討論・批判・発表は一切自由。

(一) 組織として文化運動を実行する場合には、同士の総意を以つてすること。

(二) 組織—名称「土曜会」

名称については種々と案があつたが、毎月最終土曜日に会を開くといふところから結局平凡に決定。ブラジル語の名称については追つて研究・決定する。

会員—第一回以降の出席者を発起会員として会を成立させる。

新会員は会員三名以上の推せんをまつて例会で検討の上、加入の可否を決定する。参加申し込み者があれば矢張り例会で決定する。

会務処理—委員制でやつて行きたい。委員が分担して都合よく処理して行くこと。何か会として企画する場合は例会で決める。

例会—毎月最終土曜日午後二時、蜂谷邸を煩して開くことに決めておく。例会では会務・会員動静・機関誌編集について話し合ふ。毎回必ず誰かが研究を発表し、会員が自由にこれを討論すること。

会費—経常費及び機関誌費支弁の為、会員から月額拾クルゼイロを徴収する。

(三) 機関誌—名称「時代」(ポ語名は追つて決定)

之も決定までには古典ルネサンス、新傾向色とりどりの案が討議された結果平凡なところへ落ち着いた。年四回発行。当初は増写版で辛抱する。六〇頁位のもの一〇〇部。(会員外に配布も含めて)

(四) 事業—当分は機関誌を通じて文化運動の展開を計ること。会の内容充実を待つて機が熟したらその都度必要な企画を試み

ること。
 最初の委員として半田・木村・河合・橋本・増田・鈴木・江見・齊藤をあげた。委員は会務の遂行上、他の利や其の他便利の良い者を推したものである。

右の引用によって「土曜会」が如何なるものであり、その機関誌である『時代』がどのような目的で発行されたかは明かであろう。いわばリベラルな知的サロンとでもいうべきものを日系人社会の中に形成し、そこでの知的活動の成果の発表機関として意図された雑誌と思われるのである。この第一号に掲載された会員名簿によれば会員二〇名、会友一名である。ここにはイロハ順であることが示されているだけで、会員の職業などは記されていない。しかしながら、この三年後に発行された第十二号の座談会の出席者の紹介を第一号の会員名簿に重ねると次のようになる。新聞記者、画家、弁護士、教師などの職業は知的サロンを形成しやすいものであったと思われる。なお空欄のものはその座談会に出席しておらずこの限りで不明を表す。ただし、玉木、古野の両氏については後に引用する第一回の例会の報告から農業と判明するのでここに記す。

半田 智雄 (画家)	植木 隆治 (農業)
橋本 悟郎 ()	久保 豊 ()
林 繁雄 ()	山城 如世 (新聞記者)
大原 豊 (農業)	増田 健次郎 (画家)
河合 武夫 ()	馬淵 知世 ()
吉田 光雄 ()	古野 菊生 (農業)
玉木 勇一 (農業)	安藤 潔 ()

浅見 鉄之助 ()	鈴木 梯一 (弁護士)
齊藤 広志 (新聞記者)	
木村 義臣 (新聞記者)	会友
江見 清鷹 (新聞記者)	蜂谷 専一 (貿易商)
本山 善徳 (数学教師)	

三、「土曜会」の活動

「土曜会」の活動については、先の第三回準備会の報告に続いて、一回から三回までの例会の報告がある。その有様を知ることができ貴重である。次に掲げる。

△ 第一回例会 一九四六年十月二十六日

安藤 河合 鈴木 木村 古野 大原 玉木 本山 半田 増田 山城 齊藤 江見 久保の十四名。

今回は特に山城君を招待し、前回の申し合わせに従ひ、本会席上で推薦、満場一致で会へ入ってもらったのは将来のため喜んでいいと思う。それから久しく顔を見せなかった大原・古野・玉木三君が、農繁期にも拘らず敢えて出席してくれたのもうれいことであった。但し、討論の際終始沈黙していたことは少し淋しかった。もっと喋ってほしい様な気がする。

課題「民主主義は何処へ行く」

半田の話題にかかるテーマだが、少し大きすぎたのではなかったらうか。半田はテーマをテーマとしてせつめいし、之を会員の自由な討論の種とした。故に銘々いささか勝手な観点から討議して、判っているようで仲々まとまらない議論に終始した。進行係をつとめた江見の技術的拙劣さもあつたかも知るぬ。次回はこの技術的方面に意を用ふる必要があらう。ただ討論が結

論にまでいかなかったからと言つて不成功であつたとは決して言はれない。その行程の間から考えさせられた幾多のものを得ただけでも、効果があつたといへると思ふ。日本の将来に関する思惟が要求する限り、今後はいく度か此のテーマが繰返し検討されねばならないのではなからうか。

今回のテーマとしては安藤が「第二世に関する考察」を提案した。恰度「週報」誌上山城が発表した一文が世間に問題となつて種々な方面に関心を持たれていた際だからさっそくこれを探り上げることとした。七時頃閉会。後は例によつて少時歓談の後に散会。

山城に、第二回例会には日系伯人中話の判りさうな者をえらんで連れて来て呉れるやう依頼した。

会報第一号原稿をなるべく早くくまどめたいと希望して置いた。会費十月分収納。河合保管。

△ 第二回例会 一九四六年十一月二十日

安藤 木村 河合 鈴木 増田 山城 齊藤 江見の八名、特に會長助成氏を招待した。日系伯人として招請にに応じてくれたのは、田村・吉瀬・広田の三君、之はすべて山城の斡旋による同人中種々の理由で欠席が多かつたことが残念だ。特に半田と橋本が病氣であつたことが惜しまれる。健康を心がけてほしいと衷心から希望する。橋本はもうよくなつた由。

事務方面的委員から先ず事ム報告と事ム上の相談を行った。その要領は、

(1) 同人雑誌発行の件―第一号(明年一月中発行の予定)は謄写版、第二号からは活字印刷、編集担当は江見と齊藤。原稿

の締切は十二月中旬まで。会報掲載のことに会員名簿添付のこと。会費収納報告のこと。

(2) 雑誌刊行費捻出の件―主として積立会費により不足分は専ら寄付によること。初号には

(3) 各自の原稿は四〇〇字づめ二〇枚まで。

(4) 古野は詩一篇を届けてくれた。(事故を以つて欠席)

(5) 討論の行き方―先ず種々やってみること。

(6) 事務的なことはなるべく討論開始前にすませること。

(7) 第三例会は二月二八日、ミズホ植民地にピクニック。忘年会をかねて行ふ臨時会費として若干支出のこと。斡旋方は

江見・安藤が引受けること

右の決定は討論開始前から其の後にかけて話合ひ、ほぼ意見の一致をみたもので、便宜上一括して報告の形をととのへて置く。

課題「第二世問題」

山城と半田とが「週報」に発表した論文を中心に安藤が司会して話を進めた。在伯邦人社会の性格、日系伯人の傾向、将来への希望、指導の必要の有無など種々論ぜられたが、田村・吉瀬君の将来に対する心がまえを語るうちに、彼らが何を考へているかが窺われたやうである。その政治的活動に関して是非を問はれたが、大いにやりたまへと激励した。

ただ討論が本質的・抽象的に行きがちなので、日系伯人諸君には少し物足らなかつたのではないかと思はれたが、後で聞いてみると種々啓発されるどころがあつたと喜んでくれたから、あながち不成功ではなかつたと思ふ。

今回の課題は「日本の将来」とし、政治・経済・文化等百般

に至って各人がその専攻方面を担当し研究を発表する。それから討論するといふ形で行くことに決めた。

会費十一月分収納

第三回例会には蜂谷氏を招待して今日迄種々お世話にあづかった事を感謝することとした。

次回の課題に対する研究発表は予め会員に指名担当させた方が良からうといふ議もあった。或はさうするかも知れない。

△ 第三回例会

一九四六年十二月二十八日、サン・ベルナンド近郊みづほ村中野邸日本座敷を借り忘年会を兼ねて開く。会する者、安藤・河合・鈴木・斉藤・増田・橋本・本山・植木・木村・大原・玉木・浅見・江見の十三名。別に蜂谷氏とみづほ村関係から松本・林・藤永三氏及び菊池氏を招待した。

会員中、半田が病後の大切をとって参加せず、古野が事故のため不参加、論客二人とそれに山城の顔を見なかったことは何と言つても残念であったが、久しぶりに遠方から印原・玉木・植木・を迎へ、病全く癒えた橋本の姿を見たことはうれしかった。

集まりがおそかったので例会は午後五時近くに始めた。記念撮影は蜂谷氏を煩した。司会は江見。会務報告を終つて、新会員の推薦を行ふ。馬淵知世を会員に、蜂谷氏を会友に推すことに決定。蜂谷氏に今日迄の援助を感謝した。

今回の課題は「日本はどうなるか」であったが、時間の関係で、江見が経済方面から簡単に所見を述べたのち、他の所見発表及び討論は翌日に延ばし、招待した林氏に対し、「日本農村

今後の在り方」について所見を訊く。終つて林間に火を焚きシユラスコに興を行る。健淡痛飲、議論大いに涌いたが、細雨に妨げられて室内にさけ、暫く酒を飲んで夜半寝につく。蜂谷氏・斉藤・増田は帰宅した。

翌二九日は江見方に集まり昨日に引きつづき討論す。陽光樹間をもれて大気頗るさはやか。談論風発してつくるを知らず。午食を共にして、松本・中野両氏に礼を述べ、午後三時ごろ散会。各自家路に向かった。

尚此の日、林氏を会員に推挙した。

(以上、江見・斉藤)

このような研究会「土曜会」にもとづいて『時代』が発行されたのである。ここで課題として取り上げられたものは、

民主主義は何処へ行く

第二世問題

にっぽんはどうなるか

という日本で言うところの戦後の問題であり、ブラジル移民という日系人として避けられない課題である。「土曜会」の例会報告は、第二号、第三号、第四号、第五号、第十一号に見ることができ。『土曜会』で何がテーマとされ論じられたのか、各々の号から課題及び発表者を抜き出し示すこととする。

『時代』第二号には、四回、五回、六回の例会報告がある。

第四回例会 一九四七年一月十八日、蜂谷邸、参会者十四名

課題 一、邦人社会の将来(河合・半田・斉藤)

第五回例会 一九四七年二月十五日、蜂谷邸、参会者十一名

課題 一、邦人社会の将来(鈴木)

二、ローマ字採用論(ブラジルに於ける日本語表現問題・増田)

第六回例会 一九四七年三月二十一日、蜂谷邸、参会者二十名

課題 一、在伯日本人の日本語(古野)

二、日本歴史の再検討(安藤)

第三号は、七、八、九回の例会報告を載せる。

第七回例会 一九四七年四月二十六日、会場の記載無し、参会者十二名

者十二名

課題 一、日本画について(半田)

二、日本文学について(古野)

第八回例会 一九四七年五月十七日、蜂谷邸、参会者十一名

課題 一、相対性理論について(本山)

第九回例会 一九四七年六月二十一日、蜂谷邸、参会者十一名

課題 一、『時代』第二号批判

第四号は、十、十一、十二回の例会報告を載せる。

第十回例会 一九四七年七月十九日、蜂谷邸、参会者十三名

課題 一、日本移民の同化過程に於ける諸様相(斉藤)

第十一回例会 一九四七年八月二十三日、蜂谷邸、参会者十五名

名

課題 一、日本移民の同化過程に於ける諸様相(斉藤・前回の継続)

の継続)

第十二回例会 一九四七年九月十七日、みづほ村、参会者八名

課題 一、『時代』第三号批判

第五号は、十四、十五、十六、回の例会報告を載せる。

第十四回例会 一九四七年十一月二十二日、蜂谷邸、参会者八名

名

課題 一、『時代』第四号批判

第十五回例会 一九四七年十二月二十一日、蜂谷邸、参会者八名

名

課題 一、二世は一世に何を求めるか(コチア産業組合での座談会の継続)

座談会の継続)

第十六回例会 一九四八年一月十七日、蜂谷邸、参会者十二名

課題 一、二世は一世に何を求めるか(前回の継続)

以下「土曜会」の例会記は第十一号に一つだけ載る。

第四十四回例会 一九四九年十二月十七日、みづほ村、参会者六名

六名

課題 一、『時代』第九、十号批判

これ以外の例会記が『時代』にどうして掲載されなかったのかは不明である。後に示すように座談会が行われた場合、その記録がこれに代わることかもしれない。それにしても、三年間で四十四回とは持続力のある研究会であったといえよう。このような研究会を踏まえて雑誌『時代』が生み出されて行ったのである。

では、その『時代』とはどのような内容のものであったのか。次にこれを明らかにしてみたい。

四、『時代』に掲載された文章

さて、『時代』第一号は、A5判(以下の号も同じ)、七六ページ、縦書き、ガリ版刷り(ただし二号からは活字印刷)、「一九四七年一月三十一日 発行 土曜会同人誌 時代第一号(非売品)」という奥付で発行された。発行人 発行所の記載はない。

各号がどのような内容を持つものか次に掲げる。目次と本文表題と違うものは本文にあわせる。目次のないものも掲げる。表題、筆

(8)

者の順である。なお、各々の表題の上の番号、◎印は私に記したものである。◎印は日本語ないしは日本語教育についてのものである。

時代 第一号(七六ページ)

一九四七年一月三十一日発行

- 1 国民国家論 江見清鷹
- 2 知性人としての教養と読書 アンドウゼンパチ
- 3 新文化建設の指標 半田知雄
- 4 はげの木の歌 古野菊生
- 5 随想 河合武夫
- 6 進化と退化 橋本悟郎
- 7 同化の問題 齊藤広志
- 8 世に出るあとさき 龍人
- 9 年頭の所感 増田健次郎
- 10 会報
- 11 編集後記
- 12 会員名簿

時代 第二号(四〇ページ)

一九四七年発行(奥付なし)

- 1 巻頭言
- 2 幾何学に於ける公理及び定理の本質 山本善徳
- 3 常識の性格とその限界 アンドウ・ゼンパチ
- 4 詩II虚の胡桃・他一篇 古野菊生
- 5 子孫問題に関する一考察 半田知雄
- 6 人種心理について 齊藤広志

- 7 在伯邦人 鈴木梯一
- 8 随想二題 龍人
- 9 北伯雑見記 真木蒼
- 10 土曜会例会報告
- 11 編集後記

時代 第三号(六三ページ)

一九四七年八月発行(奥付なし)

- 1 巻頭言
- 2 いわゆる物質文明と精神文化 半田知雄
- 3 たそがれ雑記 古野菊生
- 4 ユークリッドから非ユークリッドへ 山本善徳
- 5 文化の本質と特殊性 アンドウ・ゼンパチ
- 6 伯国植民におけるユダヤ人と流刑人 齊藤広志
- 7 ラシストの弁 久保 裕
- 8 カンギー夜話 草野 繁
- 9 北伯雑見記 真木蒼
- ◎ 10 ローマ字について 増田
- 11 人物評(アンドウ・ゼンパチ) 武 生
- 12 新刊紹介
- 13 例会報告
- 14 編集後記

時代 第四号(六七ページ)

一九四七年十一月発行
編集兼発行人 香山夫揚

- 印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
- 1 巻頭言
- 2 同化問題の諸様相 斉藤広志
- 3 ユークリッドから非ユークリッドへ 本山善徳
- 4 ギアレチカ 鈴木悌一
- 5 生活と娯楽・家庭 アンドウ・ゼンパチ
- 6 人口統計について 江見清鷹
- 7 マルクス無心状 古野菊生
- 8 絵かきの繰り言 半田知雄
- 9 秃筆酔歩 増田健次郎
- 10 詩(自画像外四篇) 古野菊生
- 11 詩(帰路、業天) 古田土光良
- 12 読書余録 河合生
- 13 図書紹介
- 14 ネオ・ラジズム論に答う 斉藤生
- 15 「くにの歩み」批判
- 16 弁証法談義 アンドウ・ゼンパチ
- 17 例会野告
- 18 編集後記
- 時代 第五号(五八ページ)
一九四八年三月発行
編集兼発行人 香山夫揚
印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
- 1 巻頭言 何を二世有識者に望むか
二世問題をめぐる座談会(二世懇談会の批判)
- 2 二世問題をめぐる座談会(二世懇談会の批判)
- 3 芸術の価値の問題 半田知雄
- 4 数学の時代的特色 本山善徳
- 5 伯国植民史―其二―黒人奴隷の輸送 斉藤広志
- 6 詩(中学詩集) 古野菊生
- 7 鈴木氏の批判に対する反駁 アンドウ・ゼンパチ
- 8 オロシヤの見える午後 古野菊生
- 9 全伯人陸上競技印象記およびレコードの推移 古田土光良
- 10 所感 橋本悟郎
- 11 ひとり言
- 12 バベルの塔
- 13 新刊紹介
- 14 例会報告
- 15 編集後記
- 16 O que Descjam os Niseis dos Isseis Reportagem de FUYOU KOYAMA
- 時代 第六号(七三ページ)
一九四八年六月発行
編集兼発行人 香山夫揚
印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
- 1 巻頭言 邦人社会の自覚
移住四十年の座談会
- 2 対伯日本移民に関する二、三の考察 江見清鷹
- 3 日本語と二世 山城ジョゼー
- 4 日本語と二世 山城ジョゼー
- 5 アフリカ神降し

- 6 奴隷と社会・経済 齊藤広志
7 生物化学の最近の進歩 吉間重一
8 自分の顔 本山善徳
9 本についてとりとめもなく 古野菊生
感情について アンドウ・ゼンパチ
11 絵画漫筆 半田知雄
12 日本社会学の現状
編集後記
- 13 時代 第七号(五六ページ)
一九四八年十一月発行
編集兼発行人 香山夫揚
印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
- 1 巻頭言 指導者の思想的混乱
2 懐疑の弁 河合武夫
3 数について 本山善徳
4 外来語と俳句 増田秀一
5 本についてとりとめもなく 古野菊生
6 殺菌と化学療法薬剤 吉間重一
7 いもりの黒焼き 鈴木悌一
7 詩・或る日曜日 半田知雄
8 最近の感想二つ アンドウ・ゼンパチ
無粋なはなし 草野繁
10 短歌鑑賞について 武本由夫
11 編集後記
- 1 時代 第八号 在伯邦人の諸形態特集(五六ページ)
一九四九年三月発行
編集兼発行人 香山夫揚
印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
1 巻頭言 コロニア文化への一考察
2 聖州邦人の同化と雑婚 齊藤広志
3 ブラジルにおける日本語の将来について 増田秀一
◎ 4 邦人子弟への葡語および日本語教授について アンドウ・ゼンパチ
5 在伯日系人口推計 山本喜誉司
6 雑詠 武本由夫
7 弁証法に対する私の疑問 河合武夫
8 ヴィイルスの話 吉間重一
9 読書余滴 山城ジョゼー
10 ある日の座談
11 同人・新誌友名簿
12 編集後記
- ◎ 1 時代 第九・十号(七十ページ)
一九四八年十月発行
編集兼発行人 香山夫揚
印刷所 グラフィカ・ブラジレイラ社
1 美術理解のために(われわれのたどって来た路) 半田知雄
2 コロニアに於けるローマ字書き日本語の立場 増田秀一
3 非決定性に就いて 河合武夫

- 4 グラシリアーノ・ラーモスの作品に就いて 井関譲治
 5 連続と不連続 本山善徳
 6 ミスチカ 鈴木悌一
 7 わがコロニア雑感 齊藤広志
 8 唯物弁証法と世界観、河合氏の疑問に答える アンドウ
 ・ゼンパチ
 9 詩(「冬の夜」夕焼) 香山秋子
 10 一叢の緑 武本由夫
 11 木村義臣論 草野生
 12 ヴィルスの話 吉間重一
 13 "O NISSEI" LIGEIOS TRACOS Fuyou Koyama
 14 O PROBUREMA DA PAZ E OS CIENTISTAS
 JAPONESES Jose Yamashiro
- 時代 第十一号(四十六ページ)
 この号は、前の九、十合冊と同じ奥付があるが、とびらの絵の下には、第十一号・一九五〇年五月とある。前号の奥付を誤って付けたと思われる。
- 1 永住論の再検討 半田知雄
 2 「ブラジル経済」に就いて 江見清麿
 3 訳詩四篇 井関譲治
 4 日本語文法私見 アンドウ・ゼンパチ
 5 安藤氏の反駁に就いて 河合武夫
 6 飲酒の話 吉間重一
 7 極限 本山善徳
 8 本山善徳論

- 9 かきなおされたニッポン歴史 アンドウ・ゼンパチ
 10 土曜会と「時代」
 11 例会記
 12 編集後記
- 時代 第十二号 移民問題特集(三十二ページ)
 一九五〇年十一月発行
 編集兼発行人 香山夫揚
 発行所 聖市グワデルベ街六九八
- 1 巻頭言
 2 「日本移民を検討する」座談会
 3 移民というもの 半田知雄
- 時代 第十三号(五十ページ)
 一九五〇年八月発行
 編集兼発行人 香山夫揚
 発行所 聖市グワデルベ街六九八
- ◎1 二世と日本語問題(座談会)
 2 人物論(山本喜督司)
 3 転換期に立って同胞社会の歴史を思う 半田知雄
 4 三価論理の話 本山善徳
 5 ブラジル発見後におけるポルトガルの社会 アンドウ・ゼンパチ
 6 干ばつと文学 井関譲治
 7 学校風景 鈴木悌一
 8 編集後記

時代 第十四号(四十七ページ)
一九五一年十一月発行^(注1)

◎1 コロニアの日本語(座談会)

2 在伯同胞社会の思想史の一断面 半田知雄

3 サンパウロ今昔 S・O・S

4 南ミナスの金 齊藤広志

5 日本へ帰ったYからの通信 X Y Z

6 ブラジル小史

7 あとがき

時代 第十五号(五十九ページ)

一九五三年五月発行

1 巻頭言

◎2 ブラジルの日系人に関する最近の調査研究について 斉藤広志

3 ブラジルに於ける日本語の運命 半田知雄

4 戦後日本社会の精神状況 アンドウ・ゼンパチ

5 在国近代文学展望 井関讓治

6 ブラジル小史

7 編集後記

以上が『時代』の全文章である。論文、随想、座談会記録、詩、編集後記など合計で一五九となる。このうち、日本語ないしは日本語教育に関わるものは一〇篇である。

五、日本語および日本語教育についての一〇篇

ここにあらためて一〇篇を掲げれば、

(1) ローマ字について 増田

(2) 日本語と二世 山城ジョゼー

(3) 外来語と俳句 増田秀一

(4) ブラジルにおける日本語の将来について 増田秀一

(5) 邦人子弟への葡語および日本語教授について
アンドウ・ゼンパチ

(6) コロニアに於けるローマ字書き日本語の立場 増田秀一

(7) 日本語文法私見 アンドウ・ゼンパチ

(8) 二世と日本語の問題(座談会)

(9) コロニアの日本語(座談会)

(10) ブラジルに於ける日本語の運命 半田知雄

である。

これら一〇篇が、どのような内容のものであるかを簡単に紹介し、今後の検討の課題としたい。

まず(1)は一ページの半分の分量、およそ四〇〇字の短いものである。筆者は、「増田」と姓が文章最後に記されているだけで名は無い。この増田は、おそらく(3)(4)(6)の増田秀一かと思われる。その内容は次のようなものである。八月三十一日(一九四七年か)付のパウリスタ新聞のポルトガル語欄に、日本の大新聞社間でローマ字採用の議が行われ、読売、報知紙に至っては全面ローマ字にしても宜しいという意見である。日本文化の解説、表現に日本語が一番適当である以上、二世諸君に習ってもらう上に、また伯国人一般に紹介する上にローマ字は良き武器である。母国の現

状がこう進展してきた以上、ここ(ブラジルの日系社会)でも真剣に考慮されてもいいのではないか。増田はこのように述べる。この主張は、(6)の論文で八ページにわたって展開される。日本語の表記は漢字、平仮名、片仮名、といった異なる文字を組み合わせて複雑である。漢語、同音異義語を理解するためには、表語文字を表音文字に改めることは不可能だと断定するものも少なくないであろうが、

いわゆるローマ字論者たらずとも、事ここに至っては何とか簡略、改良の余地はないものか、もし複雑な文字の故に国民が言語教育上無駄が多いとかそのために文化水準の向上を阻まれたり、科学する上に非能率的であったり、延いては国語を愛する風がすたれたりすることになれば、これは大いに考えねばならない。

とし、ローマ字書き日本語をブラジル日系人社会で普及させることを主張する。

この(6)に先立つ(4)の論文は、

山本喜誉司の推計によると、一九五〇年現在、一世の人口が十三万一千四百四十三、二世が十二万七千五百三十、三世が二万一千二百七十三、四世が三百七となり、二世以降の人口統計は十四万九千十で、一世の人口を一万七千九百六十七人凌いでいることが解る。その意味は一世とその子孫を二つの文化系列に振りわけて考える時の二つの社会があらわされるわけで日系総人口二十八万二千五百五十三人に対し五割三分強が、ブラジルの生活環境を生まれるとすぐから身につけていることとなり、その勢力が、日本の生活環境を身につけてきた者の勢力よりも大きくなったことが解る。しかもこの傾向は年を追うて著しくな

るのである。

とまれ、地元発行の六新聞と数冊の雑誌が読まれ、日本からの刊行物も可なり輸入されているほどの在伯日系社会が保存している日本語を、子々孫々に伝えようとするならば、今にして「うつくしい日本語をやさしく伝える運動」を実行に移して置かなければ、ブラジルにおける日本語の将来は決して樂觀できないと思う。

と述べる。増田の「うつくしい日本語をやさしく伝える運動」が、(6)の「ローマ字書き日本語」の主張となったものと思われる。

(3)は、俳句のなかに外来語が入り込んだ現象を述べたものである。日本のものを説明した後、ブラジル日系社会での日本語化したブラジル語をもつ俳句を示し、

ファゼンダへ通う教師の日覆馬車

の「ファゼンダ(農場)」のような日常語となっているものは、この句の場合動かせないとする。生活が次第にブラジル語の中に浸りつつあるので必然的な現象であるとする。俳句の場合でも、ギョチない「日本語訳」を使うより、親しみ深いブラジル語ですっきり表現するほうがいくらか楽しいか知れない。「氷菓子」「アイスクリーム」より「ソルベツテ」の方が面白いし実感がある、とする。

(2)の「日本語と二世」は、「ここで言う二世とは、日本民族的文化の影響を受けること少なく文化的にも立派にブラジル人であるとみられる者」であるとして、

勿論例外はあらうが当国の高等学府に学ぶ二世でポ語と同時に日語も自由自在に使ひこなせる者は少ないやうである。それは決して日語に対する冷淡さ、或は無関心から生じた結果ではな

いと思ふ。否、大ていの二世大学生が日語の必要性を痛感している筈だ。現に自由職業（医者、弁護士等）にたずさわっている者はその職業上どうしても日語が必要なので学校を出てからでも勉強している程である。しかし日本語特有な困難性は彼等をして日本語の専門書を読むことを殆ど不可能ならしめている。そこへゆくと西欧文明諸国の言葉は初歩文法の手ほどきさえすれば早速高級な専門書が読める便利がある。……

前述の如き現状を前提として一般二世の日本語教育を考ふる時次のやうな事が言へると思う。習得困難な日語の深い研究は日本語及び日本文化に特別の興味を有する日本人或は他のブラジル人が勉強出来るような日本語講座に限り、一般二三世は出来るだけ葡語に力を注ぎ知識の吸収を計るのが本人のためでもあり、亦日系人全体の文化水準向上にも便宜で有利ではなからうか。

と説く。ここに言う「日本語講座」がブラジル日系人社会の中で発展し、結実したものが、サンパウロ大学にある日本文化研究所ということになる。

アンドウ・ゼンパチの(4)と(6)の論文は、教育の体験記と口語文法の活用について論じるものである。(4)は、終戦直後からサンパウロ市郊外の通称みずほ村といわれている邦人集団地でのものである。

ブラジルの農村にある邦人コロニアの子供たちは、ニッポン語もポルトガル語も極端に語数が少い。日々の生活が単純で外部との交通接触がまれであるから、言葉の数は僅少でたりるわけである。……

一つ一つの物に、それ固有の名前をつけずに、似たものは、

一つの名前でまとめ、それらを区別するためには説明的な語をつけ加えるいい方は、野蠻人の言語に普通であり、赤坊もそうだ。したがって、語数は少なくすむ。こうした傾向がニッポン人の集団地においては共通であるとすれば、これは重大な問題である。まず第一に正しいニッポン語が忘れられると同時にそれに代わる正しいポルトガル語も覚え、コロニアだけに通用する独特の俗語だけしか知らないですませるといふ結果になろう。

と説く。こういったことを踏まえて、(7)では日本語教育に有効な文法の必要性を説く。アンドウの主張は、日本語の動詞の活用に付いてである。

国文法の活用というものは雑然としていて、たとえ、この活用表をおぼえたとしても、時制や法による動詞の変化はサッパリわからない。

とし、さらに

時制（現在・過去・未来）と法（直接法・接続法その他）による語尾変化と、それ以外の場合すなわち派生動詞をつくるときの語尾変化とを切りはなすべきであると思う。

として活用の意味を文法機能から再構成することを試みている。そして、近く初歩の教科書を兼ねた文法解説書を出版する予定であると述べる。この本については現在のところ不明であるが、アンドウの意図は、日本語の構文単位と語とが一致しないという点をポルトガル語の文法構造から整理しようとしたものと言えよう。

(8)(9)の二つの座談会は、問題が多岐にわたっていることから簡単に要約することは難しいが、(8)は大体出席者たちの日本語習得の有様の説明であり、(9)はコロニアの日本語について

の分析が行われている。それによれば、コロンビアには日本でのような流行語がない、日本語に愛着がない、等が論じられている。そのなかで、「日本語に愛着がない」という原因はなんだろうか。」という問いかけに対し、出席者の一人は

親たちは日本語といえば文字のことしか考えない。日本文化といえど歪められた精神主義をふりまわすことしか考えない。郷愁といふ母国情緒といっても、おおむねは一世の独りどがりです。この一世の異常心理からわり出した教育方針では、二世が離反してゆくのは当然ということになる。こんな雰囲気からは日本語に対する本当の愛情は生まれてこないのではないかと述べている。^(注2) ブラジル日系人のありさまが種々述べられている。そして(10)の論文は、結論として

ブラジルの日本語は、どうなっていくかということはいろいろな立場から論じられて来たが、これを客観的に冷静にその運命をたどって研究したものを私はまだ読んだことがない。これは日本語を愛する日本人にとっては、たえがたい苦痛を與えるものにちがいない。だから現実の分析には多くふれないうで、保存のための対策を講じることが主となって来たものである。

しかし、究極においてブラジル化することが移民一般の運命だとすれば、その過程において日本語がどのような経路をたどってブラジル化するか、即ち日本語がブラジル語に代わるかということを研究するのは、われわれのなすべき一つの任務ではなからうかと思う。そして、もしこうした研究が、本当に学者によって専心なされたとしたら、日本語の長所や短所も副産物としてはっきり研究されるのではなからうかと思う。

と説く。しかしながらこういった立場での研究を派遣期間中に知る

ことはできなかった。これはサンパウロ大学日本文化研究所の活動の一つの柱になるものであり、ブラジルに関心を持つ日本の研究者にとっても興味あるテーマである。

以上、サンパウロの日本語雑誌『時代』がどのようなものであるか、また、そこに見られる日本語観日本語教育観について検討をした。これについてはさらに詳しい検討と、さらに多くの資料の収集が必要である。

(注1) この号のあとがきによれば、『時代』の読書はさいきんニッポンでもかなりふえたため印刷をニッポンでやる方がいろいろ便宜があるので本号からそうすることにした。」とある。奥付は、

“ERA” NO. 14-Novembro de 1951

Director Responsavel: Fuyou Koyama

Rura guadalupe 69-Sao Paulo

日本取次所

神戸市生田区海岸通五、商船ビル内

日伯協会 福田美美

とある。

(注2) このことは、ブラジルの日本語教育では今日でも問題が引き継がれているものといえよう。一九八九年六月一日のサンパウロ新聞では、「転換期の日本語教育」の見出しと共に「話術伝授か文化伝承か」という見出しで日本語教育の現状についての記事が載る。

また、日本語普及センター『会報』第三号(一九八九年四月)によれば国際交流基金サンパウロ事務所長梅宮正勝氏は、

ブラジルの場合を考えてみますと、確かに日本語能力試験

では現在世界のトップレベルにあるということが出来ます。しかしながら受験者の殆どは日系子弟であり、非日系ブラジル人も含めた総体的視点からみた場合、欧米、東南アジア諸国などに比し著しく立ち遅れているといわざるを得ません。ブラジルの日本語教育は日系のみであっては残念ながら将来的に不安無しとしません。これを大きな流れとするには非日系ブラジル人も巻き込んでいくことが重要な課題であろうと思われれます。

と述べている。ブラジルでは、日本語教育とは何をどう教えるのかということが常により先鋭的に問いかけられているのである。

〈付記〉

本稿執筆の契機となったものは、冒頭にも述べたように、一九八九年三月から一九九〇年二月まで、国際交流基金により、ブラジル・サンパウロ大学へ客員教授として派遣されたことである。

今回の派遣では多くの方々の援助を得た。

派遣教授としての機会を与えて下さった国際交流基金、なかでも現地で滞在中種々の便宜を与えて下さった国際交流基金サンパウロ事務所の梅宮正勝所長(当時)、並びに現地スタッフの、ジョー・タカハシ、サエ・イカリ、リリア・ゴンドウの各氏。

客員教授として受け入れて下さったサンパウロ大学日本文化研究所(CENTRO DE ESTUDOS JAPONÊSES DA UNIVERSIDADE DE SÃO PAULO)のジネー・ワキサカ所長(当時)、研究所のサカエ・ムラカミ・ジロウ先生、タエ・スズキ先生、リジア・マスマ・フカザワ先生、ルイザ・ナナ・ヨシダ先生、ベアトリス・シズコ・タケナガ先生、ジョンコ・オタ先生。研究所図書館での資料収拾、文献調査など親切に援助して下さいました柳絃子司書(当時)。

日本語教育の現場の問題など、ブラジルにおける日本語教育についてお教え下さったアリマンサ (ALLIANÇA CULTURAL BURASIL-JAPÃO) のネイダ・コクボ先生をはじめ諸先生。

ブラジル事情、日系人社会についてお教えいただいたサンパウロ人文科学研究所 (Centro de Estudos Nipo-Brasileiros São Paulo Brasil) の臨坂勝利先生、宮尾進先生。

以上の方々に謹しんで感謝の意を表します。

一九九〇年九月三〇日稿一